

只見 ぜんめえ物語 ⑤

— ぜんまいの仲買人 —

六月の半ばから下旬にかけては、泊まり山の人たちが山を下りてくる時期です。この時分、只見町には町内外を問わず、大勢のぜんまい仲買人が、競争で買い付けに走り回っていました。そして、昭和四〇年代半ばには、この数週間に只見町だけでも数億円という大金が舞い降りていました。まさに、ぜんまい版ゴールドラッシュの様相を呈していたのです。



▲ぜんまいのシビ切り(イラスト・筆者)

仲買人がぜんまいを買い付けるとき、生産者ごとに品質のばらつきがあるので、必ずすべてのぜんまいを自身の目と手で確認してから価格交渉をしたといいます。具体的には、カマスや南京袋に入ったぜんまいを持参した袋に詰め替えます。この時、自身の手でぜんまいをつかみ上げながら、ぜんまいの乾燥状態や縮れ具合、皺の様子、カビの有無、シビ(ゼンマイの元の硬い部位)切りが、きちんとされているかどうかを確認します。

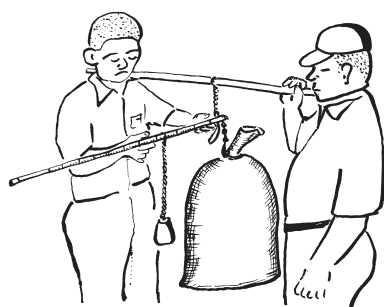
次に、竿秤(さおばかり)にかけて目方を測ります。そして、伝票に、たとえば「極太」一貫五五〇匁、「太」三〇貫二四〇匁というように記入していきます。同時に生産者が納得できるよう説明しながら単価設定を行います。単価はぜんまいの様子によってまちまちでした。つまり、「おなじ」太でもさまざまな単

価設定がなされました。これは、生産者にとっては一番緊張する瞬間でもありました。これら一連の流れは、後でトラブルが発生しないようにすべて生産者の目の前で行っていました。

支払いは、通常、現金支払いが原則。一軒の家に百万円、二百万円という札束を置いてくるというのは、そんなに珍しいことではなかったといえます。だから、仲買人は数千万円という資金をいかに準備できるかが大きな課題となっていました。

また、ゼンメエメエテ(商品のツケや借りたお金の返済もこの時一緒に行われました。ゼンメエメエテを差し引かれた後、生産者の手元に残る現金はほんのわずかというケースも多々あったようです。

昔、村人の中には翌春の泊まり山をもくろんで、多額の借金を背



▲竿秤(さおばかり)で行うぜんまいの計量(イラスト・筆者)

負い込む人も見られました。しかし、本人や家族の病氣や怪我など予想外の災難に見舞われ、山に行くこともままならなくなるといったケースもありました。こんな時、担保に入っていた田畑を失ってしまった、生活が一層きびしくなってしまうという話もよく耳にします。そんなことから、只見町ではぜんまいのことを「貧乏草」と揶揄した言い方も伝わっています。

米屋商店の菅家俊一さんは、父の俊雄さんがぜんまいの仲買を手広く行っているのを見たり手伝ってきました。昭和四〇年から六〇年ごろのぜんまい取引量は数千貫目にも上り、倉庫では人を雇って毎日山のように積み上げら

れたぜんまいを前にシビ切り作業が行われていました。時には、ひと春で一〇貫目入りの南京袋が五袋、つまり、約一八〇キロのシビが出たこともありました。この作業の中で再度、極太・太・細と仕分けされました。そして、最後に南京袋一袋につき一〇貫目のぜんまいを詰めて一俵とし、荷札に「極太」などの表示をしました。また、大量のぜんまいを長期間保存しておくためには、薬品による燻蒸も行われなければなりませんでした。

米屋商店の場合、集めたぜんまいを売る先は、関西の乾物卸業者が主でした。中でも大阪の「花菱」という業者は群を抜いていたといえます。

一方、新潟県小出の「星元」というぜんまい仲買人は、全国からぜんまいを買い集める大手の仲買人として広く知られていました。当時、只見町には一〇軒ほどの仲買人がいたのですが、その小さな仲買人の多くからも買い上げていました。只見町で生産されたぜんまいの三割ほどが「星元」に流れて行ったといえますからその規模が推し量られます。